

IQAI Management System News

INTERNATIONAL QA INSTITUTE (NPO 法人 国際品質保証協会)

巻頭に寄せて

理事長 西原 美津子

CQA/CBA/CHA



(写真は朝日新聞による配信画像)
ソチ五輪のノルディックスキー、ジャンプ男子ラージヒルで
銀メダルを獲得した41歳の葛西紀明選手

2014年の冬のスポーツの祭典であるソチの五輪が18日間の競技日程を終え、2月末に幕を閉じた。日夜、多くの感動を与えた選手らの欲々の活躍場面はテレビ他のメディアで報道された映像でご覧になった方も多いだろう。日本選手は、スノーボード男子ハーフパイプで冬季五輪の日本史上最年少のメダリストとなった15歳の平野歩夢選手から、7度目の五輪で個人種目初のメダリストとなった世界の“レジェンド”と呼ばれる41歳の葛西紀明選手まで、幅広い活躍があった。中には、期待されながら失敗をしてフリーの演技で見事に挽回した浅田真央選手などもいて、映像を見る我々の感動も一つには括れないが、選手の方々には心から感謝の念を送りたい。

さて、我が会の活動とも関係のある国際標準化機構が発行しているISO9001の次回2015年版の改訂作業がCD版まで進み、現在DIS版への作業が進んでいる。ISO9001も発刊以来25年を過ぎ、改訂といっても形ばかり変えることに意義を見出しているように見られる。2000年以降のこの規格の策定状況には関心が薄くなっていくのは止むを得ないかもしれない。とは言え、国際規格の改訂は、大なり小なり運用組織に及ぼす影響は否めず、当会でもDISが発行される段階で、解説セミナーを開催していく予定である。

ISO9001の発刊後間もなく創設された当会も、ほぼ同じ年齢を経てきたことになるが、NPO法人となつてからは5年の節目に当る。新年度を迎えるに際しては、例年通りのASQ資格取得希望者への各種セミナー、化学物質管理者養成セミナーなどと併せ、よりよい活動組織を目指して、喫緊の課題である当会理事会の改変が待っている。

引き続き、皆様方のご支援をいただければ幸いです。

目次

| | | |
|--|-----------|---|
| 巻頭に寄せて | 西原 美津子 | 1 |
| ASQ CQE を受験して | 野林 文彦 | 2 |
| ISO TC69 国内報告会に 思うこと | 佐藤 美由紀 | 3 |
| “200年企業”に学ぶ成長と持続の条件 — 日本経済新聞大阪本社訪問記 — | 大阪分科会メンバー | 4 |
| CQE 受験記 | 水村 徹 | 6 |
| CSQE 合格体験記 | 木下 英太 | 7 |
| 事務局から・編集後記 | 佐藤・石原 | 8 |



NPO 法人 国際品質保証協会は、QA(品質保証)に関連する活動を通して日本の繁栄に奉仕・貢献することを目的として1991年に設立された団体で、今日まで ISO を含む各種マネジメントシステムの効果的活用について、わが国の主要課題に対する総合的な支援活動、内部の教育、調査・研究、講習等の会員活動に加え、アメリカ品質学会(ASQ)の日本支部として国際的にも活動しています。

ASQ CQE を受験して

野林 文彦 CQA/CQE/CQT

受験の動機

2013年初頭、ASQのこれらの試験の存在を知り、近いうちにCSSBBかCQEを取得したいと思うようになりました。6月にASQ試験第一弾でCQA合格後、半年後のCQEに挑戦することを決めました。

受験準備—第1段階

先ず10月のCQT試験に向けて準備開始。入手のCQE HandbookはCQAの倍の厚みに「厄介なことを始めてしまった。」の後悔も少し。2012年の段階で、ANOVAって何だ？の自分の最大の課題は統計。後半3章をまず実施。結構な時間もかかりましたが、例題を計3回程度で実施。CQEのHandbookは、編集が女性ということもあるのか、記載が分かりやすい気がします。

一方、理解補助で購入のQC検定教本が、日本語なのになぜか分かりにくい。(どうしてこんな説明表現なの？等々)一方、日科技連出版の大村先生の本は、分散分析からDOEが非常に分かりやすく書いてあり、理解の助けになりました。また、自分は統計ソフトMinitabを所有していたため、実際に業務で活用を試みました。

受験準備—第2段階

演習は、Quality Council of IndianaのSolution Text 300題を最初に実施し、10月のCQT前には計3回を実施。まずまずの段階でCQT合格を達成。

一方CQEは、合格率60%前後の難関であり、QC検定1級の方々も不合格となる場合があることを聞き、より確度を上げるためCDのE-examの1000題を購入。統計/信頼性等苦手なところは繰り返し実施。(E-exam1000題中にはSolution Textの300題を含むが、自動集計機能もあり、弱点はどこか？2度目以降で改善したか？などの管理も可能。)苦手な章は60%前半であったのですが、最終的には80%後半まで到達。総所要時間で210時間程度/半年の準備としてはあまり多くないと思います。

試験当日

160問で5時間はやはりタフな試験です。前回同

様、水と蜂蜜キャンディに加え、チョコレートを準備。ペースを考えるも、前半2時間で60問。間に合わない！焦る中で、これらを食べてなかったのに気づき、午後は10分毎に1個のペースで補給するとペースが改善。(耐久スポーツの要領。余るだろうと思っていましたが、足りませんでした。)

一因には、最初の20分で、頭を悩ます問題が2,3題続いたのもありますが、分からなくとも、160題中の少数でしかなく、見た瞬間に“あとで考える”の即時判断も必要と思います。また、繰り返す事前の演習と異なり、初めて見る問題では、「頭のギヤ」が入るのに自分の場合は少し時間を要し、迷ったものは後からロジックを整理して最初の選択から変えるということも10題程度実施しました。(CQAでも経験)

試験後と今後

結果を待つ間々とした1週間後、Letterが到着したときは大変うれしく思いました。半年の準備は短いと思いましたが、結果が出てほっとしました。

アメリカの提携先のEngineerにも連絡したら、喜んでくれました。その中の1名が“you find your eyes are now opened to a whole new view of the process”とEmailで送ってくれたのですが、現在の自分の状態を言い当ててくれました。

「自分だったら、この工程の課題解決にはどうするべきか。」がより明確になったのを実感します。

今後はCQEらしく仕事を行うのは勿論、この「有効な問題解決の方法取得」をより確実なものにするために、次の資格受験も予定しています。

終わりに

漸く前述のアメリカのEngineer達と話が出来る国際標準の技術者の肩書が付いたように思います。中国や韓国、インドの合格者も継続して多い状況であることを認識しています。中国はSix Sigmaを国内産業振興の一方法として技術者認定等の動きが明瞭です。海外生産の続く“品質の日本”であるならば、アメリカのこの資格水準であれば、平気で英語で受験し、合格する位は、もっと多くの技術者は可能だろうし、その位出来なくてはならないのではないかと考えます。

肩書/資格/免状では出来ることにならないと言われる人もおられますが、海外相手ですと、広く認知されている資格がなければ相手にもされないのではないかと？現在の国際化の進行方向を見ていると、日本の資格がその視点で本当に十分に役に立つのだろうか？この疑問は未だ払拭出来ずにいます。

ISO TC69 国内報告会に思うこと

IQAI 理事 佐藤 美由紀
CQA/CQE/CQT

不況の煽りを受ける規格作成

2013年6月、ASQの本拠地であるミルウォーキーでTC69（統計的品質管理のISO規格を作成するためのテクニカルコミティー）の世界大会が開催され、続いて同年9月には日本国内報告会が開かれました。

一番の驚きは、ヨーロッパ各国の経済危機の波がISO規格の世界まで押し寄せているということです。国または企業の予算不足から、総会に出席するヨーロッパ人が激減し、このままでは他の国の意向のみで世界規格が作成されてしまい、偏ったものが出来かねないという懸念の声があがっていました。



シックスシグマは何処へ向かう？

個別案件で特筆すべきはシックスシグマを扱うSC（サブコミティー、小委員会）からの報告です。このグループでは相当複雑な統計手法について討議しているようでしたが、統計学が専門の教授からは、

「70年代に『使えない』と言われ、淘汰された手法を今頃蒸し返している」

「古い時代からずっと教科書に載っているような解説を、わざわざ規格に書こうとしている」

「相当困難で誰も使えないような理論を規格にしようとしている」といった、手痛いコメントを頂戴していました。

シックスシグマを取り入れた、又は取り入れようとしている企業は、本当にこんな難解な手法を望んでいるのでしょうか。すべての企業に統計学の専門家がいないわけではありません。シックスシグマのコンサルティングを専門にしている団体でさえ、必ずしも数学者を擁しているわけではないのです。使ってもらえる規格を作らなければ意味がないと感じた事実でした。

シックスシグマ関連の報告では、更に驚くことがありましたので、ここにご紹介いたします。

まずは、「シックスシグマ手法のためのベンチマーク」という規格を出そうとしていることです。これは、ヨーロッパではベンチマーク専門会社があるほど流行していることにも関係しています（韓国でも人気だそうです）。この規格は、業界ごとに見るべきポイントを定めた内容になっているそうですが、ベンチマークに規格、しかも「シックスシグマ手法のため」と限定されるとは、かなりマニアックです。

「統計的品質管理によって不良率を下げる試みに特化したbest practice のため、規格に沿ったベンチマークを行いましょう」ということでしょうか。これだけ狭い目的のために、画一的なルールが必要なのかどうか私には判断しかねますが、「昔から知られている手法を寄せ集めて無意味に用途を限って規格化した」という結果にはならないよう、今後注目していきたいと思えます。

次に驚くのは、「シックスシグマとリーン改善における主要員の能力」という規格です。これは、いわゆるリーンシックスシグマとは、名前が似ていても全く異なるものです。

この規格はイギリス人のアイデアなのだそうです。「シックスシグマもリーンも何かを改善することには変わりはないのだから、まとめて一つの規格にしまえ」という乱暴な発想から来ているのだとか。日本チームがびっくりして「こんな原案を国に持ち帰ったら大ピンチだからやめてくれ」と申し出たら、逆に驚かれたそうです。

文中では、「シックスシグマを導入する企業ができていなければならないこと」などを規定するようですが、要員の能力としては、ブラックベルトやグリーンベルトなどの資格が既に定着しています。これ以上何を規定しようというのでしょうか。イギリスはそれに紐を付けて、更に要員の公的認証についても規定しようと頑張っているそうです。何故なら、認証制度を確立するとお金儲けになるからです。BSI（英国規格協会）が力を入れていると言う話でした。ここでもやはり、規格を使う側より作る側の事情が色濃く出ています。

ISO9001が何の目的で生まれ、どうやって急成長し、なぜ結局役に立たないと廃れて行ったのかを思い起こし、同じ轍を踏むことにならないと良いと思えます。

こうして国際規格が制定されるまでの過程を見ていると、規格を元に社内規定を作ったり、監査したりするのは逆の面白味があります。一度発行されてしまえば、変えることはなかなか容易ではない規格です。発行前に世界で（英語で）戦える日本人が一人でも多く輩出されることを願って、今後もIQAIの活動に 열심히参りたいと思えます。

“200年企業”に学ぶ成長と持続の条件

— 日本経済新聞大阪本社訪問記 —

IQAI 研究会／大阪分科会メンバー

一瀬 功(幹事)、秋山 鎮男、森 厚夫、
由田 薫 (ASQ-CQA, CHA, CPGP)、
水本 光春(文責)

はじめに

2013年11月29日金曜日、淀川の川面を吹きわたる師走の僅ただしさを予感させる肌寒い風に吹かれながら、私達大阪分科会のメンバーは程よい緊張感と、この日を迎えることができた達成感を抱きつつ日本経済新聞大阪本社を訪ねた。同社では、連載記事「200年企業 —成長と持続の条件—」の執筆を担当されている記者の一人、竹田忍氏に應對していただいた。

持参した「研究会活動報告」をもとに約2時間半に亘り、取材時のエピソード等を伺い、200年以上持続している老舗企業に共通する本質的なことなどについて懇談することができた。ここにその訪問に至るまでの活動の経緯と結果、そして訪問時の話題や感想などを述べる。

テーマ設定の経緯

大阪分科会では、これまで内部監査の実態や認証の継続と辞退など ISO 9001 に関することをテーマに取り上げ研究活動を行ってきた。2011年春、新たな活動テーマについて討議する過程でメンバーから次のような提案があった。

顧客満足のためになすべきことは多々あるが、先ず第一に挙げられることは、企業が存続していることである。日本には老舗と云われる企業の数が世界でも断トツ多いという特徴がある。長年に亘り存続している老舗では、事業継続に不可欠な核心的な取組みが行われているのではないだろうか。

この提案をもとに、折から連載されている日本経済新聞の「200年企業」に着目し、研究テーマとすることとした。

活動の概要と経緯

事例研究用の基本情報として、連載記事「200年企業」のNo.145から220までの75件を活用した。約2年半、全17回に亘り各老舗の事例について要点を発表し、討議を行った。

事例研究を重ねる内に事業継続の条件が見えてきたので、それらを「行」に各老舗、「列」に9項目に分類した視点を設定し「事業継続の条件(さまざまな視点)」と題したマトリックス表を作成した。さらに、各老舗がどのような時代に創業したか、歴史上の主な出来事と併せた「200年企業の創業年次一覧表」の老舗年表を作成した。これらをもとに、事業継続の核心は何かについて「列」の各項目の視点から個別に考察を行い、総合的な考察につなげて行った。

こうしてまとめて取り組んでいる過程で、この分科会で研究を重ねて分析・考察してきた結果は、記者の皆さんの記事執筆の意図から見てどうなのだろうかという素朴な意見が自然発生的にメンバーから出てきた。活動の当初には想いもしなかったことであるが、この研究成果を持って日本経済新聞社を訪ね、担当されている記者と懇談してみたいというメンバーの想いが一致し、幹事経由で同社と交渉を重ねた結果、竹田記者との懇談の日を迎えるに至った。



事業継続のさまざまな条件

研究会の活動結果と日本経済新聞社竹田記者との懇談を通して学んだ内容を含めて要点をまとめると、200年以上に亘って事業を継続してきた企業には概ね次のような条件が多重・複層的に備わっていることが分かる。

1. 醸造業や製造業などのものづくり、そして旅館業や販売業などのサービス提供を問わず、それぞれの分野においてオンリーワンともいべき独自性のある商品・サービス、いわゆる「強み」というものを有している。時代の変化・流れ、顧客ニーズの変化を感じ取り、その「強み」を柔軟に発揮し、新たな商品開発やサービスの提供、あるいは新分野へ脱皮するなど、変化に柔軟に対応している。その一方で独自性のある商品

を頑なに守り通して長きに亘り顧客からの信頼を得て持続している老舗もある。しかし、それを維持するために自らは柔軟に変化していることは言うまでもない。変化を読み取りながら「強み」を活かして変化に柔軟に対応している。

2. 「企業は人なり」と云われるように、どの老舗も人材の育成・確保に余念がない。海外を含む他企業での修行、計画的な後継者育成、優れた後継者の招聘など人材重視の経営姿勢が基本にある。そうした結果として、危機に直面した時に中興の祖とも云われる人材がタイムリーに出現し、新たな飛躍につながっている。後継者の育成には日頃からの教育が大切であることは言うまでもない。

3. 幾多の戦災や天災に遭遇し、資産の喪失や原材料の入手難、経済統制などに見舞われても、そうした難関を智慧と工夫をもって自力で乗り越えている。何かあればすぐに政府に援助を求める現代の経営者とは大きな差を感じる。

4. 権威者の天皇や有力富家、権力者の将軍や有力大名、そして各地の有名社寺。それらから「御用達」に指名された老舗が多く、また、その庇護の下にいた老舗も多い。品質と信頼を保証する最高のブランド効果であり、店の存続に大きな意味があった。特に、藩の「御用達」は地元の「特産品」として藩の経済政策、財政確保の面からも重要な位置づけになっていた。

5. 事業を継続していく上で大切なことは「一人勝ち」にならないことである。地域社会に貢献し、日本の伝統文化を守り、同業他社や仕入先との連携など地域社会との共生は企業存立の土台であり、それに努めている経営者も多い。かつて近江商人が大切にしていた「三方よし」は、その基本理念を表す名言であり、一方でリスク回避の処方箋としての意味も込められている。

あとがき

「研究会活動報告」に目を通された竹田記者から、中興の祖が現れた時代背景の調査など、いくつかのアドバイスや感想を頂いたが、私達の研究成果と記事連載の意図とは、それほど乖離はなく基本的な方向性は合っていた。研究会での議論や竹田記者との懇談をもとに、エピソードや感想などを含めて、あとがきにした。

1. 企業存続に重要なキーワードは「かきくけこ」、すなわち感謝・勤勉・工夫・儉約・貢献である。その反語

は「忘恩・怠惰・模倣・浪費・寄生」である。

2. 海外に目を向けて、各国の200年企業についてその上位5を挙げると、次のようなデータがある。

| | | |
|----|------|--------|
| 1位 | 日本 | 3,113社 |
| 2位 | ドイツ | 1,563社 |
| 3位 | フランス | 331社 |
| 4位 | イギリス | 315社 |
| 5位 | オランダ | 292社 |

[出典]

後藤俊夫著「三代つぶれない会社のルール」

日本を除けば、いずれもヨーロッパ諸国が上位を占めている。これらの中には日本人になじみのある老舗もみられる。歴史、風土、文化、地勢、政治形態などが異なる中、両者の老舗における共通点、相違点などはどのようなものか新たな興味が湧いてきた。

3. 国が参加しない国際会議などにも積極的に社員を派遣し、その情報等を国内に提供している日本を代表するH社は、地域社会への貢献の意識が高い企業である。

4. 一般的に「老舗」に対しては、堅苦しい、変化に乏しく保守的などのイメージが強い。そうした傾向が強いのは「老舗もどき」であり、「ほんものの老舗」は変化することを躊躇しない。だから200年以上存続しているのである。

5. 今回の活動期間中、研究対象の神戸灘の老舗酒造メーカー「神戸酒心館」と「櫻正宗」が直営するそれぞれのお店を訪問した。三現主義の観点からそれぞれのお店で忘年会を開き、記事の内容を踏まえ現地で検証を行った。さらに、日本経済新聞社訪問に際し、倉敷の老舗「藤戸饅頭本舗」(1184年創業)の饅頭をお土産に持参した。饅頭一筋の老舗の名品を前にその由来など饅頭談義になり、和やかな雰囲気の中で懇談に入ることができた。

(編注:西洋のビール、ワイン、ウイスキーほか洋酒も同様。醸造以外では、何十社を越すスイスの時計が有名。)

終わりに、老舗の視点から顧客満足やISO 9001を振返ると、それらは何ら新しいことではなく日本人も何百年も前から当然のこととして実践してきていること、また、「かきくけこ」が示すように事業継続に不可欠な点はあるが、核心的というものは特にないのではないかと今回の研究を通じて改めて認識した。

CQE 受験記

会員 水村 徹 CQA/CPGP/CQE

はじめに

2013年12月にアメリカ品質学会(ASQ)のCQE(Certified Quality Engineer)の試験に合格致しましたので、以下に感想を記載致します。

受験のきっかけ

製薬企業の品質保証部門に在籍しており、委託先製造所のマネジメントを主な業務としています。最近では、複数の海外関係のプロジェクトに従事する機会が多くなってきており、問題のある製造プロセスの是正・改善を含めた海外製造所への技術移管業務を実施しています。これらの業務では、CQEに要求されているような統計解析の知識が必須であり、これらを体系的に習得して行くためにCQEの資格に挑戦することを以前から考えていました。

受験準備～合格まで

(1) 受験準備～3箇月(前半)

2013年6月にCPGP合格後、すぐにCQE試験の準備を開始しました。まず、国際品質保証協会(IQAI)の機関誌に掲載されている過去の合格者の方々の体験記を読みました。その中で、受験準備として、①CQT(Certified Quality Technician)等の他の資格試験からステップアップしていること、②(英文テキスト(CQE Handbook等)を読む前に)邦文の統計学に関する参考書を読んでいること、が記載されており、自身の勉強方法として取り入れることにしました。

調べてみるとCQTの試験は、CQE試験の約3箇月前(8月)に開催されることが判り、CQE勉強の日程管理としても活用できると考えました。そこで、まずCQTとCQEのHandbookと“Solution Text”を購入して勉強を開始しました。CQEのHandbookは、邦文の参考書の勉強が終了するまでは見ませんでした。CQE試験までの準備期間は約6箇月でしたが、この前半はCQTを中心に勉強していました。結果として、CQTは受験日の都合がつかず、受験を見合わせましたが、勉強のペースメーカーとして役立ったこと、自分の弱い分野を把握できたことから、CQE合格の助けになったと考えています。

一方、邦文の参考書については、CQEのBody of Knowledgeを見て、自分が弱いと思う関連分野に関するものについて勉強しました。自分の知識が足りないと思った箇所については、自分専用のノートに書き写しておきました。ノートは項目別(例えば、信頼性に関する計算問題など)にまとめておき、後でCQEのHandbookを読み込んだ時に追記できるようにスペースを残しておきました。参考書として購入した書籍は以下のとおりです。

- 1) 統計学入門(基礎統計学I)/東京大学教養学部統計学教室
- 2) 信頼性工学のはなし/大村平
- 3) 実験計画と分散分析のはなし/大村平

(2) 3箇月後～受験日(後半)

後半の3箇月は、CQEの試験準備に注力しました。CQEのSolution Textを引っ張り出し、再度、問題を解いてみました。その時に、問題を計算問題とそれ以外に分類し、間違えた箇所を「計算問題用」と「計算問題以外用」の2冊のノートに追記して行きました。CQEのSolution Textを完了してから、CQEのHandbookを読み始め、試験の時に、参照しやすいようにインデックスを付けていきました。試験前の1箇月は、2冊のノートの見直しに注力して最終仕上げとしました。CQEのHandbookは分厚くて、全てを熟読している時間はありません。計算問題以外のChapterについては、CQAの受験勉強で得た知識が役に立ちました。Handbookの内容をスキミングして、既に理解している項目については深入りせず、思い切って次のChapterに進んで、勉強時間を捻出し、試験前まで一通り読み終えました。

(3) 試験本番～合格通知

試験本番には、CQEのHandbookと自分で作成したノート2冊を持ち込みました。CQEの試験問題数は160問で、CQAやCPGPと比べると1間にかけることができる時間が短くなるので、注意が必要です。幸い、時間内に全ての問題に回答することができました。試験の手応えとして、過去のASQ試験の経験から、合格ラインを超えている感覚があり、無事1週間後にASQより合格通知のemailが来ました。

最後に

今回この原稿を書く機会を与えて下さったIQAI西原美津子理事長に感謝致します。また、三浦昭夫名誉会長にも多大なご支援とご助言をいただきました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

CSQE 合格体験記

木下 英太 ASQ CQE/CSQE

昨年12月、2回目の挑戦でCSQE(ソフトウェア技術管理士)に合格することが出来ました。2年前のCQEの試験に引き続き、またもや勉強不足で臨んだのですが、品質を管理する・保証する・高めるというのは、対象が何であれ本質的なところは同じなのだなぁ、という経験をしたと感じています。ソフトウェア品質管理とは、対象となるソフトウェアの開発やその管理方法の骨格を理解し、対象物の特性や人間的要素の影響を加味し、その上で品質管理のために何をするかを考えるということなので、対象物(ソフトウェア)の詳細は理解できていなくても、ソフトウェア品質管理の凡その見当が付き、従って試験に合格出来たのかもしれないと考えています。

今回ソフトウェアの品質管理に興味を持った理由は、日常の仕事の中で接している品質というのは、半導体などハードウェアの品質管理をするものです。

① まず、私は半導体業界に身を置いているのですが、付加価値の源泉が、他製品と同じくハードからソフトに移っていること。

② 次に、半導体そのものやそれを含むシステム全体が大規模化・複雑化しており、それにも関わらず、その開発や品質管理の仕組みを短時間で立ち上げなければならないため、全ての場合を完全に網羅することが出来ないソフトウェアの品質管理手法は現在の日常業務に生かせないかと考えました。

③ CSQEのBody of Knowledgeには、Requirement Engineering, Requirement Management という言葉があり、「要求をエンジニアリングする」、「要求を管理する」とは何だろうか、②と同様に色々なものに応用できるのでは、と思えました。自分自身普段の業務の中でも、Requirementを分析して明示化すること、そしてそれを実現するための目標を適切に設定(定義)する能力が十分ではないと感じたためです。考えてみると、これらの章に書かれていることで実行可能な品質業務が何と多いことか。

そこで、2011年12月に合格することの出来たCQEと同様の学習方法で勉強しようと、2013年初め頃にまずテキストであるThe Certified Software Quality Engineer Handbook(Linda Westfall, ASQ Quality press, 2009)を入手しました。ところが、CSQEのBOK

をまとめはじめたところで、会社の業務等が大変忙しくなり、ほとんど手つかずのまま、2013年6月の試験に臨まざるを得ませんでした。一応、CQE受験時のマインドマップで記述した学習ノートなども持ち込み、わからないところはHandbookを調べて答えを記入するというやり方で全力を尽くしましたが、やはり不合格。ただ、試験結果を見てみると、CQEの内容とオーバーラップする分野を中心に意外に点数が取れていることに気づきました。これで時間が取れない中での次回2013年12月に向けての学習方針が決まりました。

CSQEの試験範囲でCQEと重なる部分の学習ノートを再度読む。その上でCSQEの本を読み、ソフトウェア特有の部分があれば、それを抜き出して、新たな資料をマインドマップで作る。各項目や用語は相互関係がわかるように絵を描いてゆく。ただ、試験を前にして大阪への転勤ということになり、土日もほぼ時間が取れなくなりました。試験までの期間が1か月という頃からは、勉強できていないところをいかにカバーして、CSQEの試験問題に慣れるか、に集中することにしました。これは1日に僅かでもほぼ毎日行いました。試験問題集に取り組んでみると、やはりかなりの頻度で間違えます。そこでその間違えた設問のHandbook内での説明部分を読んで、チェックしておくべきと考えたら、抜き書きしておいたマインドマップに追記する。これだけを繰り返しました。

また、学習方法の他に、試験当日の問題への取り組み方も計画しました。それは次のような具合です。

① 1問目から順番に解き、最後の160問目を解答し終わったときにちょうど試験時間が終了するようペース配分する。

② ①と合わせて、試験途中での見直しと考え直しをしないこと。これにより、全試験時間を問題を解くことに万遍なくまた最大限使うことを目指しました。

③ 4つの選択肢のどれにするか迷う問題は先ずそのうちの2つに絞り、じっくり考えて一方を選ぶ。

この様な作戦で臨んだ12月1日の試験は、満足の行くような自己採点はつけられなかったのですが、それでも6月の不合格となったときよりは、多少の自信を持って解答できました。不合格でも前回よりはマシと予想しながら、試験結果の通知を持ちました。到着した通知の大きな封筒に、Congratulationsの文字が見え、無事合格できたという実感がわきました。

最後に、本稿を書く機会を与えてくださいました、西原理事長兼会長および三浦名誉会長に感謝いたします。

ASQ 公認資格試験について

三浦昭夫 (CQA, CQE, CRE, CMQ/OE, CSSBB, etc.)

今号の編集作業中に、野林文彦、水村徹両氏が ASQ 公認資格の Six Sigma Black Belt に合格し、それも初挑戦で一発合格したという、朗報が舞い込みました。痛快極まりないことです。最近、日本でも Six Sigma Black Belt が流行りだし、巷の講習会に出て簡単な筆記試験を受けた程度で称号をもらえるようになっていると聞きますが、ASQ の公認資格のものは、そういうものに比べると試験が難しく、アメリカや日本での巷の講習のレベルでは手も足も出ないという実情のようです。そういうことから、今回の両氏の快挙は大きな価値があるといえます。

思えば、1990 年代に日本人では私一人が ASQ 公認資格者だった頃に、東南アジアの人から「日本にも CQA や CQE がいたのか」と言われ、「日本の品質向上と名誉挽回のために急いでなんとかせねば」と思い立って始めた奉仕活動だったのですが、今まで諦めずに粘ってきたのが今回少しは報いられたという気がします。

上記の両氏は、取り立てて試験の準備をしたわけではなく、平素からの実務で品質と管理の本質を掴んでおられたから、問題なく合格できたと推察します。また、試験は全部英語ですが、正規の実用英語ですから分かりやすく、先ず問題はありません。そういうことなので、会員各位は大いに元気を出して、本物志向で ASQ 公認資格に挑戦して下さい。

◇◇◇ 事務局から ◇◇◇

【理事会・定例総会】

◆2月22日に、目黒区の勤労福祉会館で理事会を開催、今期の活動報告、来期の活動方針、理事会組織等について、討議しました。

◆4月19日に、理事会並びに総会を開催予定です。総会の詳細は、別途会員各位に連絡致します。

【ASQ資格試験合格者】

◆2013年12月7日

CQE: 野林 文彦 会員 (CQA)

水村 徹 会員 (CQA, CPGP)

CQA: 大槻 誠史 (非会員)

CSQE: 木下 英太 (非会員)

◆2014年3月1日

Six Sigma Black Belt:

野林 文彦 会員 (CQA, CQE)

水村 徹 会員 (CQA, CPGP)

【次回のASQ資格試験の予定】

◆2014年6月7日(土) CQE, CQA, CPGP

ASQに対する申し込み締め切りは、4月18日です。

(IQAI 事務局/佐藤央英)

編集後記

今号の「200年企業」に学ぶ成長と持続の条件」では、内容と論旨の両面で、大いに共感した。「5つの条件:強みを生かし変化に対応、人材重視と後継者についてのタイムリーな手当、自力で乗り越え(安易に政府に援助を求めない)、御用途/特産品戦略、「三方よし」と簡潔にまとめられている。「老舗の視点から顧客満足を振返ると何ら新しいことはない」という認識は、何か深いものがあるように感じた。今後の研究の成果と過程への期待も膨らむ。

「巻頭によせて」では、「ISO 9001の改訂が形ばかりを変えることに意義を見出しているように見られる」という認識に基づく解説セミナーの計画、並びに ASQ 資格取得への各種セミナーを始めとする理事会の変革を目指した新理事長の意思表示。結果的に、これらは、先の5つの条件を満たすことになるだろう。「ISO TC69 国内報告会に思うこと」では、今後の決意が示されたものと理解した。同じような考えを持った人々が種々の学会/業界でも増えているので今後に期待できる。

「受験記」は、三人の筆者がいずれも、実務上の動機から受験されたようで、即活用して行けるといふ雰囲気伝わってきた。熾烈になってきた研究・開発、成長、持続、生存、その他の場で、「夢を諦めない」という意欲が目立つ。誰もがそうありたいと思っているだろう。(石原隆昌)

発行人: NPO法人 国際品質保証協会 (IQAI)
 理事長 三浦 昭夫
 Tel.: 03-3712-6776; Fax: 03-3712-3399
 住 所: 東京都目黒区下目黒 3-24-14-703

連絡先: 事務局
 佐藤 央英 E-mail: yoshihidesato@mmm-keio.net
 Website: http://www.iqai.org
 機関誌発行/頒価: 年2回/年間1000円